
P45-05 能動的リハビリテーションを目的としたアートデバイス装置の実行可能性および受容性研究

宮坂 裕之¹、川上 健司¹、大西 齊¹、進藤 直紀¹、外海 祐輔¹、日沖 雄一¹、伊藤 和樹¹、吉岡 聖美²、岡本 さやか¹、園田 茂¹

¹藤田保健衛生大学七栗記念病院、²明星大学

【はじめに】本研究では、回復期リハ病棟に入院中の患者に対し、単調な動作にアートの要素を付加した上肢、下肢用デバイスを用い、実行可能性、受容性を検討した。【対象と方法】回復期リハ病棟に入院した患者 22 名（平均年齢 62 歳、男性、女性各 11 名）。上肢デバイスを使用してサンディング動作、下肢デバイスはヘッドマウントディスプレイを使用して立ち上がり練習を行った。本デバイスは動作回数の積算により、様々な絵画が完成する。練習は 1 日 10 分、10 回とし、毎回の動作回数と 10 回目終了後にデバイスに対するアンケート（楽しみ感、満足感）を 7 段階で評価した。【結果】下肢デバイスを用いた 2 名は気分不良により途中終了となった。動作回数（中央値）は、上肢デバイス：初回、5 回目、10 回目とも 100 回（1 名は回数減少）。下肢デバイス：初回 122.5 回、5 回目 120 回、10 回目 125 回（2 名は回数減少）。アンケート：「楽しみ感」：どちらでもない 3 名、やや楽しい 7 名、楽しい 4 名、とても楽しい 6 名。「満足感」：やや不満 1 名、どちらでもない 5 名、やや満足 1 名、満足 8 名、とても満足 5 名で、7 割以上の患者で良好な返答が得られた。【考察】本デバイスの介入期間の動作回数は維持され、本デバイスを用いたリハは実行可能である。アンケートより、本デバイスを用いたリハの受け入れは良好で、単調な繰り返し練習へのモチベーション維持に活用できる。（本研究は JSPS 科研費 JP15H02881 によって行われた）